

もしも次、生まれたなら

銭湯メイド

## 【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

## 【あらすじ】

アインズ・ウール・ゴウンと親しかったネカマプレイヤー。彼はなんと、ギルド長モングと婚約者限定イベントに出る仲だった!?

# 目次

|             |    |
|-------------|----|
| バレンタインデー特別編 | 1  |
| 終わりと始まり     | 15 |
| 人類最強と人類最高   | 24 |



## バレンタインデー特別編

レイは部屋に立ってかけてあるカレンダーをジッと見つめる。2月。たしか、アインズがこの世界に来た日と合わせて作られたカレンダーで、彼の世界の暦と同じ。彼の世界では今はきつと2月なのだろう。

時間の流れが同じなのかは不明だが。

「……………2月」

何だろうか？記憶の隅に、何か引掛かる。失ったアインズと共に生きた世界の記憶だろうか？

「バレンタインデーですわ！」

「ふわ!?!」

ジッとカレンダーを見つめていると唐突に後ろから声をかけられる。振り向くとそこには満面の笑みを浮かべるアルベド。

「さあ、参りましょう！」

ヒョイと抱え上げられるレイ。何処に？と尋ねると乙女達<sup>我等</sup>の戦場ですわー！という返事が返る。

さっぱりわからない。しかし、同じレベル100でも近接戦ビルドのアルベドと基本生産職のレイでは力比べにもならず、レイは大人しく運ばれる事にした。

「バレンタイン、この時期になると至高の御方々の話の話題に出て、ウンエーなる者達もイベントとやらを始めるようです……ワン」

乙女達の戦場……もとい厨房にてペストーニヤから説明を受ける。バレンタインというのは2月14日に行われる行事で、女性から男性に日頃の感謝、或いは好意を込めてチョコレートを送るのだとか。もつとも、友チョコ、義理チョコ、前述の感謝チョコなどもあり一概に女子が告白する日という訳ではないらしい。

「好きな人……か……」

特にそういう相手はいない。いないっいたらいない……が、感謝を伝えるという意味ではナザリツクの住民はもちろん、支配者たる彼にも必要だろう。

「……………」

「?レイ様、お顔が赤く……体調が優れぬのでしたらお休みになった方が……あ、ワン」

「え、あ……いや、大丈夫だよ」

「クツソカワイイカヨ」

「え？」

アルベドが何か言っていたが振り返ると何か？と首を傾げられた。気のせいだったのだろうか？

「えっと、一緒に頑張りましたよーねレイ様！」

と、ツアレ。そういえば、女子のイベントだというのに参加者が3人だけとは………。

「こういったイベントには、我々ナザリツクの者達は参加してこなかったのです。マーレ様達など創造主が女性の方は創造主様直々に貰っていたようすわん」

「不思議と、渡すという意志が持てなかったのです。私はこういった男女間のイベントのもといモモレイではなくアインズ様の世界の行事について再調査しましたが………知っているのは私の他にデミウルゴスぐらいかと……」

他は恐らく創造主、或いは創造主と親しい者から何かを貰う日だと思っっているだろうとの事だ。

「それ、私が上げていいのかな？彼等彼女等からしたら創造主がプレゼントくれる日なんだろう？センパイ曰く私も彼等と交流があるらしいけど、記憶を失ってる身では気が引けるなあ」

アインズが言うには、レイはアインズと同郷で、アインズの後輩。アインズもといモ

モンガの手伝いをするためにユグドラシルという世界に入り、リアルで命を落としこの世界に来たとか。

けど、思い出せない。マーレやアウラを含めた大半の者達が好意的に接してくれるが、彼等が創造主より与えられた自分との絆は前の自分。少し寂しい。

「気にする必要はないと思います」

「ツアレ？」

「私も、妹と数年間離れ離れになって、あんなことのせいで、昔の記憶なんてとても曖昧でした。それでも、あの子はまた新しく思い出を作ると言ってくれました」

「……………」

「だから、レイ様もまた新しい思い出を作ればよろしいと思います。あの方々を、嫌っているわけではないのでしょうか？」

「……………うん、まあ」

「それでは、一緒に作りましょう？あ、でも…………」

「？」

「その、身勝手なんですけど……………レイ様がセバス様にあげたら、やだなあって」

「……………反応しないんですね」



「私、モモレイ以外のＣＰ興味ないもの」

そしてバレンタイン当日。

シャルティアの場合。

「バレンタイン？そう、意中の相手に……そんな意味があつたのでありんすか  
……………」

「どうした？」

「なるほど。つまりこれはそういう事でありんすね？まあまだ夜には早いけど、ささ、レイ様に此方に。大丈夫、手とり足取り私が教えんす♪」

「……………」

この後アルベドが飛んできた。

コキュートスの場合。

「有難キ幸セ」

「そう思ってくれるならこちらとしても嬉しいよ。うん、何なら毎年作ろうかな」

「毎年……………デハ、御子ガ才産マレニナレバ……………?」

「うーん、まだそういうのは想像できないかなあ。でも、男の子だったら私が上げて、女の子だったら一緒に作って配るかなあ」

「オ、オオ……………姫、爺ハ……………爺ハアア!」

「え、あの……………ちよ、どうしたの!?!」

アウラ&マールレの場合。

「チヨコクツキー!やったあ!」

「あ、ありがとうございますレイおね……………あ、様」

「私の事を姉の様に思うのは、ぶくぶく茶釜さんがつくった設定なんだろう?なら、3人きりの時はお姉ちゃんでも良いよ」

「えへへ、じゃあお姉ちゃん達と一緒に食べよ!アタシお茶煎れるね!」

「あ、お姉ちゃ……………あ、えつと、レイお姉ちゃん……………ボ、ボクは机と椅子を用意してくる!」

この後めちやくちやお茶会した。

デミウルゴスの場合。

「ふむ、ナザリック中を回り、最後にアインズ様に？なるほど、そういう事ですか。解りました、人払は任せてください」

「人払い？」

「いやいや、今日は実にめでたい日になるでしょう」

「……………」

ユリの場合。

「チヨコレート、ですか。ボ……………あ、いえ、私に？宜しいのでしょうか、ペストーニヤ達に比べて、私はあまり貴方とは」

「いいのいいの。私が上げたいんだからさ……………覚えていないけど、貴方の創造主からも私に関する何かを入れられてるんでしょ？」

「はい、この感情は、恐らくは……………」

「なら、きつとお世話になったんだと思う。その人には、今はお礼を言えないし」

「お礼、ですか。解りました、ではこれはその時まで……………」

「ユリを生んでくれたこと。私をユリの友にしてくれたお礼……………」

「……………」

「だから、今君に、受け取ってほしいな」

「……………はい」

ルプスレギナの場合。

「レイ様〜！かわいいルプーちゃんからチョコつすよ〜！」

「あれ、知ってたの？」

「最近ツアーちゃん甘い匂いを漂わせてるんですそれとなく聞いたんすよ。レイ様も私の為にチョコヲ作ってくれてるとか。でも、どうせなら交換しようと思ひましてね」

「ルプー」

「あ、どうせならアインズ様と別けてくださいッス！私達が至高の御方に渡すのも無礼つすから。アインズ様と、分けるんすよ？」

「う、うん……………」

ナーベラルの場合。

「は、チョコ？なぜ私が人間の……………アルベド様？何か？」

「良いからこつちへ」

「……………」

「ぐふ!?!」

「!?!」

「申し訳ありませんレイ様。ナーベはどうやら腹痛のようで今日はモノが食べられないと」

「そ、そう……明日は元気な姿を見せてくれると嬉しいなあ」

「明日……分かりました。明日までには解放します」

シズの場合。

「レイ様、器用」

「シズはぬいぐるみの方がいいと思って。どう?等身大ハムスケ人形」

「最高。シール上げる」

ソリュシャンの場合。

「センパイや他の人達から聞いて彫刻したへロへロさん型チョコ。ごめんね、私が覚えていればもう少しそっくりに出来たかもしれないけど」

「いえ、いいえ!ありがとうございます!レイ様!ああ、だけど食べるのが勿体無い」

エントマの場合。

「エントマってチョコ大丈夫？」

「ええ、はい。基本的に何でも食べれますわあ……あ、勿論レイ様のことを食べたりはしませんからご安心をお」

「そっか。じゃ、はい、チョコ……食用ゴキブリを油であげて、チョコでコーティングしただけだね」

「わあい。あれ、でもレイ様平気なんですか？ゴキブリ」

「ん？ああ、私は別に……沢山いるとちよつと怖いけど虫は基本的に栄養高いし、美味しいしね……蜂の子とか」

「……私も栄養価、高いでしょうかあ？」

「食べないよ？食べないから距離取らないで」

アルベドの場合。

「最後の方になっちゃったけど、はい、アルベド……」

「まあ、私には内緒で別のを作ってたのですか」

「うん。驚かせようと思って」

「ふふ。私もです。こちらを……………」

「ありが……………あれ、これ、服？」

「チョコだけがバレンタインではありませんからね。シズとかも、そうだったでしょう？」

「確かに」

「ふふ、着付けはお任せください。アインズ様に会う前に、着替えて見せては？」

アインズの場合。

「……………」

「うみゆ……………」

自室に戻ると女体化した後輩が寝ていた。直ぐに人化を解く。アンデッドの精神に飲まれぬための措置ではあるが人間のままだと細かい事で驚いたりするのだ。よし落ち着いた。

「レイ、起きろ。俺の部屋で何している」

「ん、みゆ……………シエンパイ……………？」

「……………」

よし、落ち着いた。

しかし顔が赤いなこいつ。少し状態を調べてみるか。ふむふむ、酩酊？あ、机に並べられているウイスキーボンボン食ったのか。確率でなるからなあ、今はアイテムを外してみたいだし。というか何だこの格好、茶色の生地に赤のリボンによる装飾。可愛い。よし、落ち着いた。

「えつとお……………あれ？ここセンパイの部屋？」

「そうだ。何故ここに？」

「ええつと……………アルベドが、ここで待って……………待ってる間、ルプーがくれたチョコを……………」

「そうか……………所で、背中のは気付いているか？」

「しえなか？」

「いや、良い」

アインズは『私を食べて』と書かれている紙をそつと剥がし握り潰す。

「それで、えつと……………チョコ、というか……………うん、これ」

「ココア？」

「チョコ料理。色々考えたり、作ったりしたんですけどねえ……………何故か、センパイに



はあ……………これがしつくり来て」

「……………」

ふと、過去に思いを馳せるアインズ。

——これは、ココア？

——結構高かったつすけど、今日はバレンタインですから

——バレンタインって、お前男だろ？

——昔前は友チヨコとかあったらしいですよ？それに、所詮お菓子会社の陰謀。感謝を伝えるのに、男も女も関係ないでしょ？

「……………もううよ」

「本当ですかあ？やったあ……………」

「お前は覚えていないだろうが、私はお前が入れるココアが、大好きなのだよ……………なんてな」

後日談。というか今回のオチ。

「アルベド、ルプスレギナ………首を出せ！」

## 終わり始まり

V R M M O R P G 《ユグドラシル》。

人間をはじめとしたエルフなどの人間種はもちろんのこと、異形種と呼ばれるモンスターにさえなれる選択肢の広さが人気を呼んだオンラインゲーム。そのユグドラシルに無数に存在するギルドの一つ『アインズ・ウール・ゴウン』のギルド長モモンガこと鈴木悟。彼ははあ、とため息を吐く。

「どうかしましたか、センパイ……………」

「ん？あ、いや……………」

それに反応したのは彼の隣に住み彼を起こしたり食事を作ったり掃除をしてくれる彼の後輩。この時代、わずかな調味料ですら高価だというのにそれを複数使いクソまじい料理をここまでするのだからもはやそれは一つの才能だろう。上流階級に生まれてたら一流の料理人になっていたに違いない。

「実は女、カップル限定イベントとかが最近増えてね。珍しいアイテムもあるのに、ギルドの女性プレイヤーとタイミングが合わなくて。クソ運営め、リア充ばかり優遇しやがって！」

「あー、センパイ本当ユグドラシル好きですね」

と、笑う後輩。馬鹿にしてると言うよりは子供っぽいと微笑ましく思われているのだろう。

「でもこんなご時世、確かにネットしか楽しめませんね。仕事も忙しい人ばかりだし、休みが被るなんて稀でしょ?」

「そーなんだよ。しかもうち基本的に嫌われてるから、ギルド以外のフレンド少ないその少ない中に女性プレイヤーいないし…」

「親しくて、かつ休みの合う人ですか? ……あ、じゃあ俺なんてどうです?」

後輩が己を指さし言うのと悟はえ?と首を傾げる。

「ほら、ネカマ? って言うんですか? ……?俺が女性アバター作って、それで行きましよう。同じ会社と同じ部署、休みも同じですからね」

「え? いや、良いの? ネカマなんて……」

「所詮ゲームですし? まあ変わりにセンパイにも掃除とか手伝ってもらいますけどね」

「よし! それだけならお安いご用だ! あ、アバター作りはちよつと待って! ギルメンと相談して作ってみる!」

「それで、ギルメンさん達と作ったアバターがこれですか……すっごい美少女」

ゲーム世界の鏡に映る己の姿を見てその場でクルリと回るアバターネーム『レイ』。メンバーの一人の声優のコネを使ったプロの絵師に描かせたキャラを忠実に再現したらしい。嘘、胸だけは再現してない。レイは当たり判定が多そうだからやだ、と消したのだ。つまりペツタンコ。バードマンが興奮していた。

「それにしても、人間種なんですね。センパイのギルドは異形種オンリーでは？」

「レイは別にこの世界で何かしよう、とかないだろ？ならいつそ人間種限定のイベントとかも代わりにやってもらおうかな、と思ってさ」

「後輩使いの荒い人ですね。ま、良いですけど。ですけどオレはこの世界では全くの素人。強くなれるように訓練お願いしますね？」

「……………見た目は女、中身は男。これもこれで、堕ち描写があれば。出来れば百合のネコとして……………よし、シャルティアに設定追加しとこう」

と、バードマンがどっかに行った。あの馬鹿弟と、男性のあれみたいな肉の塊もどっか行つた。ちなみにその肉の塊、このアバターのボイスサンプル。彼女の出たアニメを見てみたが、声優は凄いと思った。声は同じ筈なのにアニメはロリロリ、こっちはしっかりした感じ。

「それじゃ早速始めましょうか。やはり戦士職ですか？」

「いいや、高火力の魔法職に決まってるだろ。な？」

聖騎士と悪魔の言葉にふむ、と考え込むレイ。この場合、どちらを取るのが正解なのだろうか？ 生憎ゲームは素人。魔法職と戦士色のどちらが優れているのか解らない。先輩の悟……………こつちではモモンガは魔法職らしいし魔法職を勧めてくるだろう。それは良くない。こういうのは自分で決めなくては……………

「……………あ、というかそもそも俺は先輩が参加できないイベント参加するために来たわけですし、戦士職オンリーのイベントがくる可能性も……………うーん、いや、収集家気質な先輩のためにいつそ生産系に……………」

その一年後、あつという間に頭角を現した。

ワールドアイテム

世界級の『鍛冶神の背負い袋』《ヴェルドンド・ナップザック》という素材が無尽蔵に取り出せるアイテムをゲットした彼女は早速様々な武器防具を生み出した。そのどれもが一級品。

素材は売れないが製作したアイテムは売れるという鍛冶職達からすれば億万長者への近道、当然狙われたがレイの客達から攻撃を受け滅ぼされた。ユグドラシルにレイ以上の鍛冶師が居ないからだ。

しかし、ある出来事をきっかけに人間種達全てがレイの命をねらい出す。

とあるイベント、『婚約』というシステムが実装され執り行われたイベントにてレイが最悪のギルドと呼ばれる『アインズ・ウール・ゴウン』ギルド長モモンガと共に参加したのだ。

ファン達はモモンガ潰す！と叫び、アインズ・ウール・ゴウンの強化を危惧した人間種達のギルドもレイからアイテムを奪おうと考えたのだ。

まあ、アインズ・ウール・ゴウンおよびレイの客達による同盟軍。さらにはレイ自身に返り討ちにされたが。

レイは戦士職も取っていた。知識ではなく体感として武器の性能やモンスターに対する相性を知っておきたいから、だそうだ。

ちなみにそのイベントで指輪ともう一つのワールドアイテム世界級を手に入れたが今のところ使う予定はなく、しかし誰かに渡すのは勿体ないと二人のアイテムボックスに仕舞われている。

「俺もすっかり有名人ですね。あ、センパイアイテム買います？」

「もらう。レイの作ったソロモン72柱剣シリーズ、今何本だっけ？」

「69本ですね。後でもつかい悪魔の特徴調べないと……ウルベルさん、次何時これ  
ますかね？」

「明日あいてるってさ」

魔導師姿の骸骨にドイツ軍服を纏った女。何とも珍妙な組み合わせで、しかし彼等は夫婦でリアルでは先輩後輩関係の男同士。何とも不思議な関係だ。

「あ、そうだ。帰ったらご飯にします？お風呂にします？」

「ご飯かな……お風呂はその後で」

「了解です……って、なんかこれ本当に夫婦みたいですね」

「……俺はたまに此奴何で女じゃないんだろう、って思うよ」

「あはは。センパイって面倒見よくてしつかりしてるけどたまに抜けてて可愛いところもあって、俺が女だったら絶対惚れてませんね」

「……え、今の流れで？」

「だって、センパイ重いんですもん」

「ええー……」

と、情けない声を出す骸骨にケラケラ笑うレイ。

「冗談ですよ。俺が女なら、間違いなく惚れてました」

イシシ、と笑うレイ。モモンガはポリポリ頭をかいた。アバターだから痒くなんて無いけど。

「尊い……」

「黙れ、姉」



こんな風な友情が何時までも続くのだと思っていた。しかしそれは唐突に終わる。

レイだけ残業する事になり先に帰った悟は今ネカフェにいますというメールに喜びすぐにログインした。待ち合わせ場所は、花畑。もはや現実で見ることの叶わぬその場を、レイは好む。ブループラネットとも仲が良い。

「よく見つけたねこんな所」

「今度ブループラネットさんもつれてきましょう」

「ははは。きつと喜ぶよ……なんかもう、ほぼギルメンだよねレイは」

「俺は異形種じゃないですけどね」

アインズ・ウール・ゴウンは異形種ギルド。人間種のレイは彼等と交流が多くてもギルドには正式に加入していない。

「その事だけど、ギルメンで話し合って、ギルドに加入させないかってなったんだ」  
「え？」

「ほら、他のギルドから勧誘しつこいだろ？もちろんレイが他に入りたいギルドがあるなら、止める権利は俺にはないけど」

「そ、そんな！嬉しいです！本当に、良いんですか!？」

「あ、ああ……あまり近づくな。ハラスメント警告が出る」

「あ、そういうえば俺女でしたね今……」

そう言って離れる。モモンガがギルド申請を行うと迷いなくYESを押すレイ。ギルドメンバーの証である指輪を渡し、それじゃあ報告に行こうとナザリツクに轉移しようとした瞬間、レイが消える。

断線か？と思った。いったんリアルに戻る。メールは、ない。普段なら直ぐに謝罪のメールが来るのに。

ユグドラシルに戻り持つ。レイは、現れることはなかった。

「……………」

モモンガ改めアインズ・ウール・ゴウンと名を変えた死の王はふとそんなことを思い出す。

本来なら加わるはずだった43人目のメンバー。自分にとって、親友だった後輩。我ながら死者に想いを馳せるなど未練がましい。アルベドにもモモレイが好き、などとぶくぶく茶釜みたいな設定付け足しちやったし……。

「火事、か……………」

彼の泊まっていたネットカフェが火事になり、彼はそこで命を落とした。ゲームではない、本物の死。

酷く空虚になり、しばらくはログイン出来ず、ログインしても彼とよく行った場所ばかり回っていた。人化の腕輪・極なんて持ち歩く癖が付いたのは彼と居たからだろう。

「……………女なら、惚れてくれていた、か」

懐かしい言葉だ。単なる冗談なのだろう。

だけど、と少しだけ期待が募る。この異世界転移。自分はサービス終了まで居たからだとして、本当にそれだけだろうか？もし、ログイン中に死んだ、というのも条件に入っていたら？

「もしそうなら、お前は今女なのだろうか？」

なにせアバターは確かに女だ。もし、この世界に女として生を受けていたのなら

……………

「なんてな。普通に、友達に戻れば十分だ」

## 人類最強と人類最高

レイはあれ？と周囲を見回す。気が付いたら、知らない場所にいた。

何でここに？確か、自分はモモンガと共に居た。何か爆音のような物を聞いたような気がして、気が付けばここにいた。

掌をみる。リング・オブ・アインズ・ウール・ゴウンが握られている。良かった、これを使えばモモンガ達の下に行けるだろう、と装着する。

「転移、ナザリック地下大墳墓……………」

指輪は、何の反応も示さない。あれ？と首を傾げる。アインズ・ウール・ゴウンのギルメンから聞いた話ではこれでナザリックに転移できるはずなのだが。突然変な場所に来たし、何かのトラブル？と、その時――

「ねえ、貴方今どこからきたの？」

「……………え？」

その声に振り返ると、そこにはキョトンとした顔で此方を見る可愛らしい少女が居た。左右で別れた黒髪と銀髪。間違いなくゲームキャラ。NPCだろうか？それともプレイヤー？

「えっと、それが解らないんです……気づいたらここにいて。俺も何がなんだか」

「俺？貴方、男？」

「ん？えっと、まあ……こんな格好だけど………」

「ふうん？女の子だと思っただけだな……ま、良いわ。じゃあ、殺し合いしましょう？」

「え、何で？——ッ!？」

キーン！と金属音が響きレイの身体が吹き飛ばされる。少女が、いきなり身の丈程はある鎌を振るレイは咄嗟に剣で受け止めた。吹き飛ばされ、床をこするレイ。少女は楽しそうに笑みを浮かべる。

「へえ、今のを止めるんだ。フフ、良いね、そうこなくちや」

楽しそうに笑う少女から猛攻が続く。新たな剣をアイテムボックスから取り出し二刀流で攻撃を捌く。

「——っ！」

強い。数合打ち合い、相手の実力を吟味する。

装備は駆け出しから中堅と呼ばれるようになる頃のプレイヤー程度の貧相な物のなのに、そのステータスは完全にカンストプレイヤー。

しかし動きはどこか拙い。カンストプレイヤー並みのステータスを持ちながらプレ

イヤースキルは素人より上程度。鍛冶職メインでありながら戦士職のカンストプレイヤートモ渡り合えるレイの敵ではない。

「ふっ………はっ！」

呼吸を整え、一気に攻める。笑みを浮かべ続けていた少女の顔に初めて焦りが入る。しかしそれは一瞬。レイの突きが己の頬をかすると、とても嬉しそうな顔をした。

一度距離をとり、剣を構える。と、同時に少女は鎌を振り下ろしていた。

「——ッ!？」

咄嗟に突きを放つが身体をひねり回避し、その勢いのまま横風ぎの鎌が迫る。地面にしゃがみ足を狙い剣を振るうが、足が消える。振り返れば鎌の柄の先端を床に突き刺し、軽業師のように棒を掴み逆さまになった少女の姿。ポールダンスのように棒を掴み回転し背を向けた。しかし、隙ではない。

グン、と鎌を振り抜く。床に深く刺さっていたのか一瞬しなり、床が砕けると同時にこれまでにない速度と威力の一撃が迫る。

「あ、く——!？」

ギリギリ回避するが砕けた床の破片が飛んでくる。一瞬判断が鈍り、鎌の刃が頬を切り裂く。

「……………?？」

何か、おかしい。この女、速くなってる？いや、強くなってる。スピードが上がったわけではない。力が上がった訳じゃない。でも、初速があがった。一撃の放ち方も。

強くなっている。間違いない……プレイヤースキルが上がってる？それも、物凄い速度で。

てつきりゲームの才能のない玄人かと思った。しかし、これでは初めからカンストキャラを与えられた素人が、漸く互角の相手に才能を開花させ始めたみたいだ。

ふー、と細く息を吐き、頬の汗を拭う。ヌルリと血が滑る。

「……………え？」

血？

この世界で？ここは、ゲームの中の筈なのに？

「……………」

意識したとたん、ズグンと痛み出す。痛い痛い痛い！何で、何が？

頬を押さえ混乱するレイに、少女は首を傾げる。

「どうしたのかしら、切られたら血が出るなんて当たり前でしょ？そんな事も知らなかったの？」

「だ、って……………ここ、は……………ゲーム……………」

「げいむ？ ああ、あなたぶれいやーだったの……………なら、残念ね。ここはそのげいむとやらじゃないわ。ここは、現実よ……………」

現実……………？ 現実？

痛みがある、殺されれば死ぬ、現実？

殺されれば……………死ぬ……………

「……………あら」

レイは武器を変える。禍々しいオーラを放つ魔剣。銘を、『ミシヤンドラ』。ウルベルトの協力の下作られたソロモン72柱劍イレギュラーナンバー番外。ランクは神話級ゴツズ。

相手は、自分よりステータスは上。プレイヤースキルは発展中。武器の性能で、押し切る！

「へえ、凄いい剣ね……………こっちでは神器って言われて、崇められてるのよ、それ」

「そうなのか。俺の作った武器が崇められるとしたら、鍛冶師冥利に尽きるね！」

ユグドラシルでは人類最高ともユグドラシル最高とも呼ばれた鍛冶師。その武器は彼女の持つ鎌とは比べ物にならない。しかし、恐らくだが彼女は何かを隠している。それを使われる前に、倒す。

(……………倒す気はあっても、殺す気はなさそうね)



人類最強と言われる法国の最終兵器、絶死絶命は殺気を感じないことにつまらそうに嘆息する。とはいえ、都合はいいのか。何せぶれいあーだ。生きて仲間にしたいのが法国の本音だろう。

が、絶死絶命はこう思う。殺す気でいったら、殺す気で来るだろうか？

使命感などない。ただ、他にしたいことがないから法国に従ってやっているだけの彼女は、ニタリと笑みを浮かべる。数十年ぶりに、武技を解放した。

「えんかしんそう炎火神葬」

「!？」

鎌を炎が覆い、振るうと放たれる。炎の津波に飲まれるぶれいあー。この程度、大したダメージにはならないことは解っている。だが視界を奪うには十分。追撃を放とうとして――

炎が覆う。

この光景を、何処かしてみた。

炎が、身を包む。炎が、身を焼く。炎が、命を燃やす。

「か、あ――」

熱い。赤い。痛い。死ぬ、死ぬ死ぬ死ぬ死ぬ死ぬ死ぬ死ぬ死ぬ死ぬ死ぬ死ぬ死ぬ死ぬ!

「あああああ——ッ!!」

「……………あれ?」

追撃しようとした鎌を止める絶死絶命。炎の中から聞こえた叫び声。痛みによる絶叫、ではない。これは、恐怖による絶叫?

炎が晴れると案の定ダメージを受けた様子のないぷれいあー。しかし、目の焦点は合わずガタガタと震え、頭を押さえる。

「……………ねえ」

「ひっ!? あ、あう……………っ!」

声をかけるともの凄いい勢いで後ずさる。涙を流し小さくなり震える様は、まるで子供だ。何が起きた? 自分の炎は単なる武技で発生させた属性付与。精神を汚染する力はない。となると、彼自身が炎に対して何らかのトラウマを持っていた?

「……………ま、良いわ。私より強いか解らなかつたけど、それでも十分でしょ」

種としては申し分ない。震える頬にそっと触れるとピクリと反応する。誰かを可愛いと、初めて思った。

既に壁際、逃げられない獲物をなぶる猫のような笑みを浮かべ、しかし不意に止まる。

無表情になつた絶死絶命はスンスンと鼻を鳴らし首筋に顔を埋めて、ペロリと赤い舌で白い首筋を撫でる。

「何だ、やっぱり女の子じゃない……………どうしようかな」

ふれいいあーだ。上層部どころか法国の人間なら誰でも諸手をあげて喜び崇めるだろう。が、今の彼女は怯える幼子そのもの。落ち着けば戻るかもしれないが、炎という最大の弱点を抱えている。

普通に考えて神人の量産道具しか使い道無いのでは？戦争に火は付き物だろう。そうなると、まあ候補は……………名前何と言ったか、取り敢えず槍持つてる隊長——だったか、自分からすればしょっちゅう代わるから忘れた——だろう。

あんな雑魚に、この子の血が、強者の血が汚される？それは流石に我慢できない。と、気配が近づいてくるのを感じる。さて、何と誤魔化すか……………

「あれ、この子の剣……………こんなのだったかしら？」

不意に、彼女が持っている剣が先程とは異なる剣になっていることに気づく。

「サ、サルガタナス！」

「!?!」

恐らく剣の名前なのだろう。それを叫ぶと同時に、彼女の姿が消えた。ちようど良いタイミングで槍を持った漆黒聖典の隊長が現れる。

「番外席次！今のは何事ですか!？」

「……………侵入者。もう終わったわ」

と、焼け焦げた通路を指さす。別に嘘はついていない。通路がああなる攻撃を放った時点で、決着はついたし殺したなんて一言も言っていない。が、どうやら勝手に灰すら残さず焼いて殺したと勘違いしたらしい。

「……………」

疲れたように報告してきます、と去る隊長の背中を見送ることもなく先程の少女を思い出す。

強かったな。きつと強い子を産むだろう。男じゃないのが残念だ。それにしても

……………

「可愛かったなあ、あの子」

あんなに可愛いんだ。きつと何処に行っても寄ってくる男はいるだろう。出来れば強い子供を産んでほしいものだ。

サルガタナス。地獄の三大支配者直属の部下六柱の一柱。空間跳躍能力を持つ悪魔の名を名付けられた魔剣はその名に恥じぬ能力で少女を離れた場所に転移させた。

荒い息を吐き壁に手を突きフラフラ歩く少女。その顔はとても整っており、人気のないその場に屯う男達の何名かが嫌らしい笑みを浮かべ近付き……………

「ひっ!？」

肩に触れた瞬間、彼女が何気なく払った腕が上半身を消し飛ばす。

その光景に驚いたのは、むしろ少女自身。目を見開き、その場から逃げ出した。

逃げ出して、足を絡ませ転ぶ。ビシヤリと泥が跳ねる。何時の間にか雨が降っていた。

「ここは、どこだ? 解らない。怖い。近付こうとする者全てが敵に思える。と……」

「貴方、どうしたの? 大丈夫?」

「——ッ!!」

声をかけられ慌てて起き上がり離れる。心配そうにのぞき込んでくる幼女の顔が見えた。

輝いているのかと錯覚するほど可愛らしい顔立ち。黄金色の髪と相まって、まるで黄金の美しさを擬人化させたような、そんな人外じみた綺麗な容姿。それが今、心配そうに歪められている。

「……………こんなに怯えて、かわいそう……………安心して、何もしないから」

「……………」

ニコツと陽光のような笑みを浮かべる幼女。その笑みに、少しだけ落ち着く。

「貴方、お名前は？」

「……………レイ」

「レイ……………レイね。レイはどうしたの？何か、怖い目にあった？」

「……………火」

「……………火？」

「火が……………燃えて、熱くて、痛くて……………」

はて、ここ最近火事などあったろうか？あるいは、何処かの裏組織に変態趣味の客に何かされたか？その割には火傷などをした様子はない。というか彼女の服、ずいぶんと上等すぎやしないだろうか？自分より上質かもしれないし、こんな意匠見たことがない。

「レイは何処から来たの？」

「何処から……………？何処、から……………あ、あれ？」

記憶喪失？演技では無さそうだ。幼女は頭を撫で、安心させるように微笑む。

「かわいそう……………ねえレイ……………私と一緒に来ない？」